

事  
村井静馬編輯  
情  
明治  
太平記  
十三編  
下

14  
2504  
26





と察せしむれば弥夫等の拳動ゆべ渠より事と  
 発せざる間小巨魁の者と探偵して捕縛せしむべし  
 べしと則ち廿四日の夜参事小関敬直と大属  
 仁尾惟光と招きあは等の事と談むる小両士も兼て  
 不平士族が形勢奈何ふと訝しむれば今宵藤崎の  
 神社の辺りへ探索の為巡查等と遣へし置されば渠等  
 が報知を聞くと後直ち小巨魁と召捕りの手配り小  
 及ぶべし杯竊り小語らひ居らむ折しも六等警部村

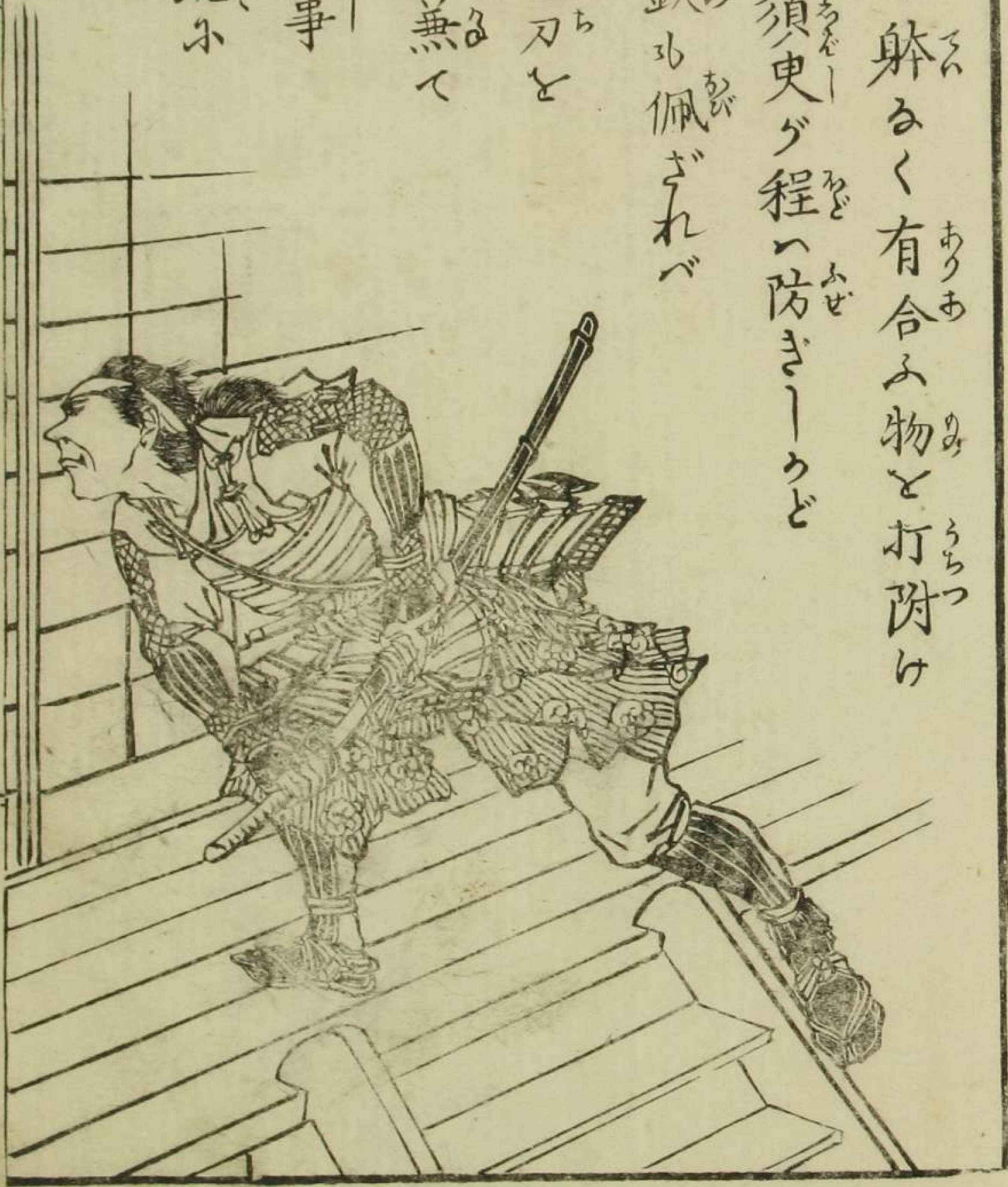
上新九郎が巡查坂口静樹と俱小遠へし入り来り  
 各位是ふ在まむる儲も事と起りたは委曲ハ静  
 樹和主より敏言上ふ及むばやと言ふ尾小就く坂口  
 静樹へ令公の前あむる故小恐ろしく找と出稟せし  
 憚りあるまむるが昇職が弟ある者此程より起  
 居行動訝しむるまむるに糸バ篤と實否と探偵  
 做せし小渠へ早晚神風連の暴徒のうち小加り  
 来り廿六日よの拳動し及ぶべきの旨慥小探り得し

うらぶ弟ありとて國賊ありて見遁さべたふらう  
 ざれば捕縛するに召連んうと思はざるふらう糸ども  
 今怒ふ渠と捕へば餘賊等更の破となりと察し他へ  
 脱するう然もみくとて其證跡と失ふとたへ勞し甲斐  
 ろた事もやらうんと村上氏の居宅に至り今此密事を  
 談ぜし俱ふ令公の御前ふ至り事と議せんとあり  
 一ゆゑ相伴ひと推参せり御賢慮奈何ふゆやと  
 事の仔細と申演しと縣令と下り居合を面々互ふ顔と

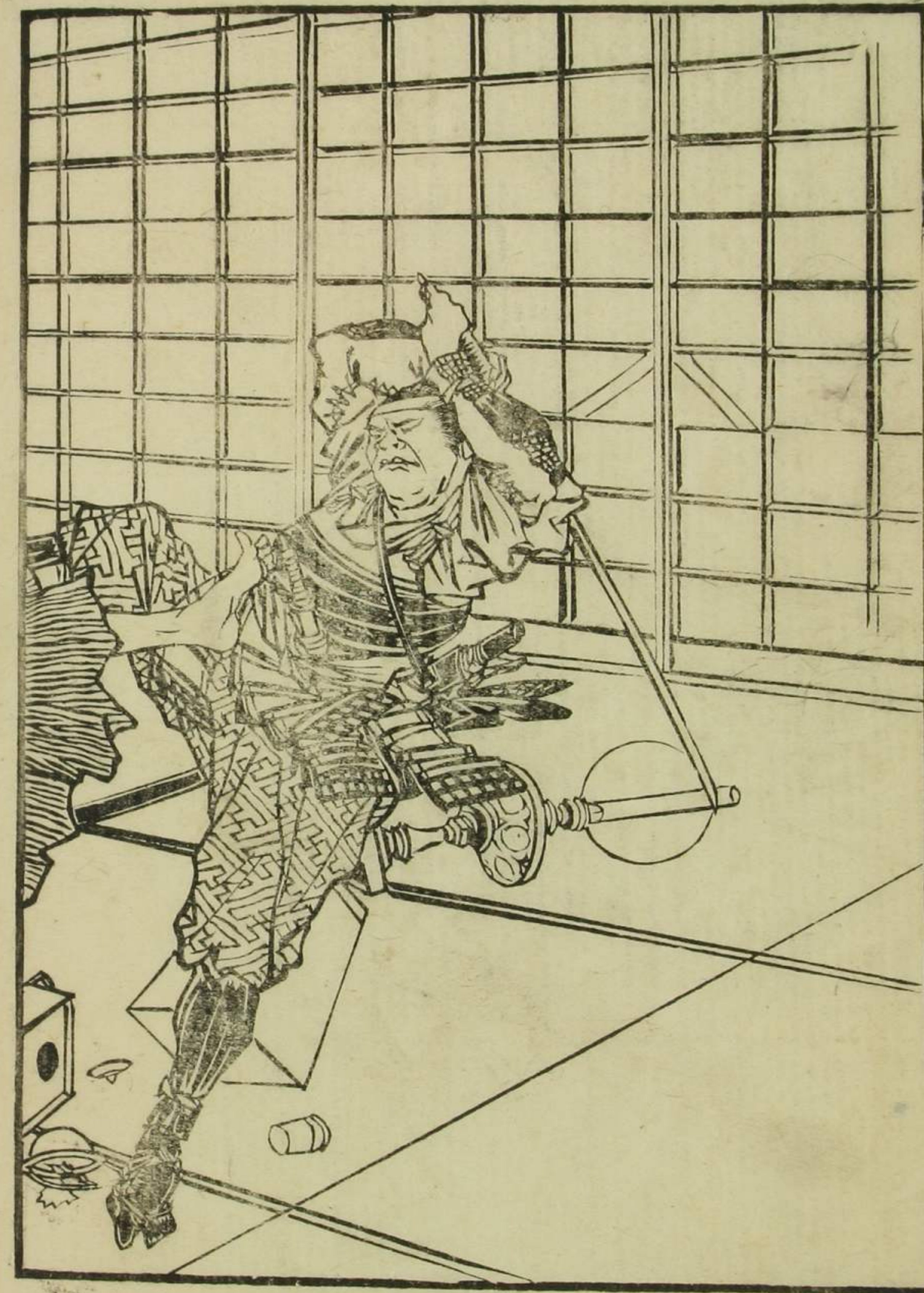
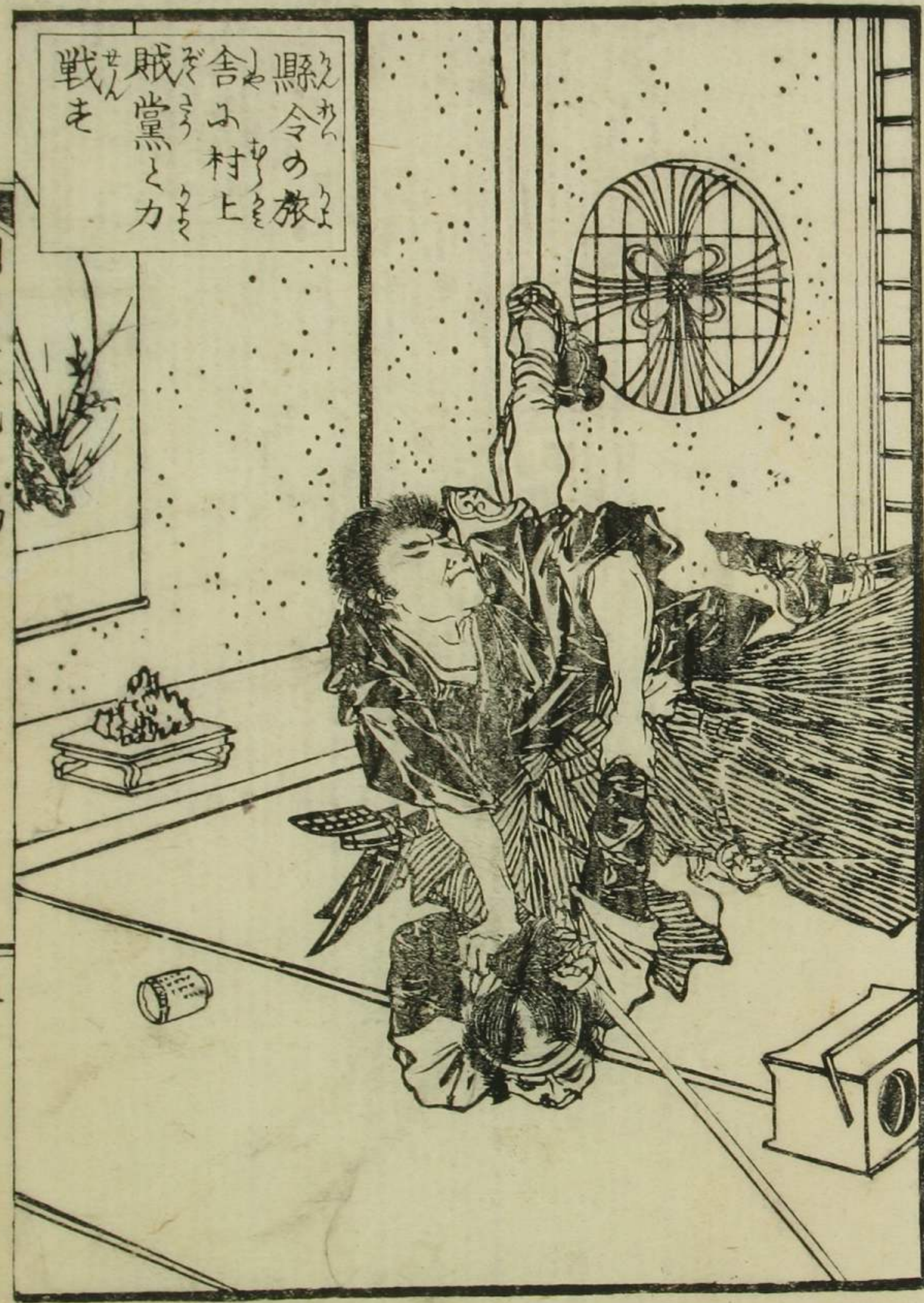
見合せて覺へむ眉と聲めたる并ぐるふ縣令と稍  
 拱きたる手と解て我も夫等の形勢と粗聞知とる  
 更らとべ小関仁尾の両士と招ぎて今密談の折  
 うらなるふ和郎と辭を聞ふ至りて宛然符節と  
 合さる如く渠等と及跡顯然なれば二葉のうらち  
 みに強断さば斧を用ゆるも及びがたの患ありんも  
 測らむと夫小就とも藤崎へ遣へし置たる巡查等と  
 らや戻り来る頃あるが歸りの遅きと心得糸とあめく

心と痛むる折一を柱に掛し時計の音と算ふれば  
 らや十一時あり焦る折一も金峯山より相図の狼  
 烟發一たりらん響きへ爰に聞へされども忽然と一  
 之玄関と庭の口より籠入りたる吉村一沼沢廣太等  
 五名が得物と振初めりて一之奸吏等既よ天誅の  
 今至とると思ひ知らざる観念せよと言ふより疾く  
 撃て蒐むる刃の電這方も覺悟へ為つととも斯く  
 速く乱入し及ぶべ一と思ひ掛れば駭きあぐるも

阿容たる躰ありあみ物と打附け  
 必ど一須臾あやうぐ程へ防ぎ一うと  
 身こ寸鉄さうてつも佩あざれば  
 砍込きりこむ太刀と  
 何なにらひ蕪むて  
 縣令けんれい參事  
 大属だいじゆも既すで小  
 數ヶ所かずヶしよの



縣令の旅  
舎村上  
賊黨と力  
戦



日本書紀

病てと負あし辛く其場を退きたる開が中に村上新しん  
 九郎くわへ則すなち熊本くまもとの人ひとふして神風連しんふうの暴徒ぼうとと恥ぢある  
 中ちゆうの同藩士どうはんしあるふ殊ことさう武勇ぶゆうは勝かと一故い一個  
 の賊ぞくの砍込きりこむ太刀たちと引外ひきしり附入つりし利腕きり捕とる  
 捨倒すてたおし膝下ひざふ駈かと押おえ付けたる程ほども所ところを今いま一個  
 が續つて蒐あるは寄よせ足あと揚あげ蹴け飛とむはさるふ  
 乍まち燈火あかりと打消うて真暗まふりし敵てきも味方あも途ど  
 と失うつて頻ありふ悶も着あるはらちふ窺うひ寄よる一個の

賊ぞくが砍込きりこむ太刀たちと村上むら上かみグ外がさんとまるふ虚間いもなく  
 右みぎの腕うでと打落うちさと這この口惜くちと片手かたして盲目めくら探さりふ  
 揉合もみあふ折をり誰たが火ひと掛かし奥おくの間まと勝手かの方かたより  
 燃上もりたる炎熾えんんふ蔓延まんて一室ひとの裡うちを焼込やしる  
 らや是これと新九郎しんくわの庭にわへとりと飛出とて我わが宿所しゆく  
 迄まに至いたり付けし痛手いたある故終ゆふ叶はな次の日息ひハ絶た  
 たりとぞ又彼巡査また坂口静樹さかハ斯かる蒼卒そうの間故ま何  
 せしとも知しとざりし後燒落あたる家うちの裡うちふ真黒まふ焦あ

死し居たると見えは是も賊徒は斫らるゝあへは是より  
先賊黨へ思ひの俣は斫散らせしうと首ツも取得せ  
しと退き去りし其後ふ所々小潜し家僕等が  
漸やく小這出て痛癢小弱し令公参事と煙りの  
中より助け出し頓て病院小搔抱き行て手厚く治療  
と加へしうと別て縣令へ重傷あるゆゑ廿七日小卒せし  
と小関参事と仁尾大属へ追々平癒させしと言ふ茲は  
又陸軍の少将種田政明のしるゝ渠等の密謀と知ら

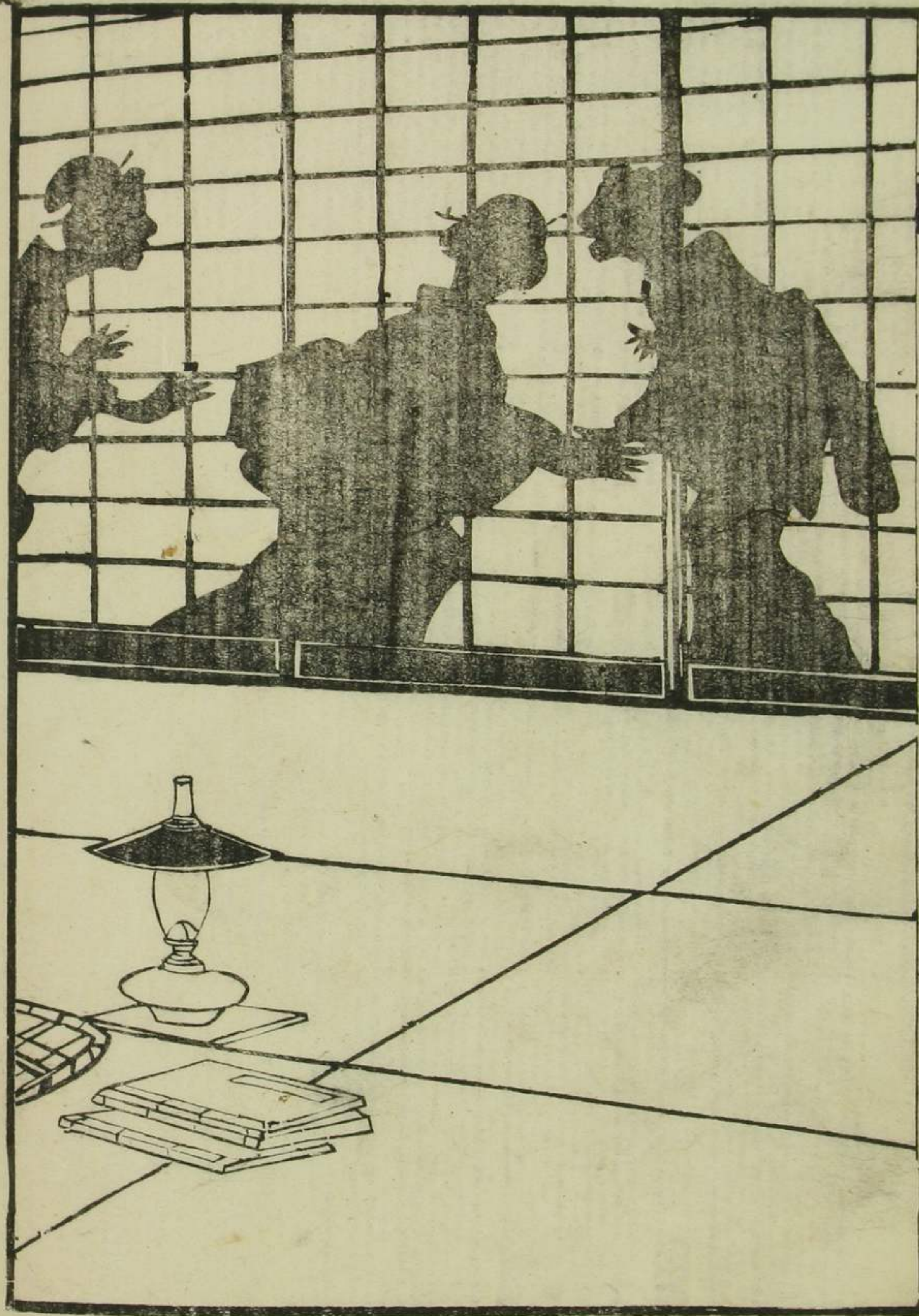
む此夜も枕と高りして卧房の裡小眠りし所へ  
赤嶺一雄等十個をく表と裏の堀と乗り越え  
準備の火薬ふ火と付たると這所彼所小投込し  
其機小乗して乱入り慌忙き支んとする奴婢等小傷  
と負せらるゝ稍少将の寝所小至り神兵爰小向へると  
種田政明疾起て刃と受けしと言ふ声小駭き覺たる  
少将が這へ狼藉と剣起て手近小置し短筒取取る  
間もつらせむ兇徒等が右左りより斫付る鋭き刃と遁



るよりく乍ち數ヶ所の重傷を受け堪へざ尻居  
ふ倒る、所と一個の暴徒が踏跨り痛まや少將の  
首搔斫て左手ふさ上げ凱歌一声叫ぶや否や咸玄関  
より走去たり時ふ少將の食客ふ大槻丈夫と喚る  
この島原の旧藩士大槻量太郎の弟もて先頃遊  
学の為ふとて東京ふ出てより又しく種田氏ふ寄宿做  
せしが其性忠直あるとて少將深くとを愛し這回も  
此地ふ連来り折もあらば官途ふも進まぬ心ありし

ふ此宵も自己が便室ふらりて書見為果し寐入る俄ふ  
奥座敷の物騒しきふ駭き覺つ起上とて耳を貫く  
太刀打の音女の叫びと逃走る声殊も炎焰の光り  
さへ此家ふ充滿せし躰もとて只事あらむと飛び起て  
主公の卧房に到りて見ると無慙の最期ふ又吃驚相  
手は誰と尋ぬると箇様々と奴婢等が答へへ開の遅  
くりり口惜や余とて遠くへ走るまど先追留と少將  
殿の怨を報つて置くべきりと死骸の辺りふ落散たる

便室を飛ぶ  
出て文夫と  
少将の横  
難ふ殉  
お



目次  
三

短筒と手ふ取上げーが多勢と相手ふ做ん事小銃と  
 不便ありと壁ふ掛る桿棒と取ろう速く腹をさ  
 敵へ何所へ逃たるやうんと稍門外まで走り出左右と  
 吃度見廻さふ一町餘り那方ふ當り物具着ー武夫  
 が一群歩行く体と夜目ふも夫と見認ーゆゑ少將  
 殿の當の讐やへ阿容々々脱をべき汚ー返せと呼り  
 みぐる白川町の浴室の前まで喘々て追行く兇徒へ見る  
 よう押捕圍と飛で火ふ入る蠅虫め観念せよと言ふよう

疾く撃て蒐る又の電光余ども這方へ必死の勢い  
 近寄る奴と打拂ひ或へ突出と棒の手の千変万化と  
 盡ー々奈何も做して少將の首級と取返さん物と  
 思ふ心を切なれど何と言ふも多勢ふ無勢殊る  
 這方へ素肌あり敵へ甲冑と粧ひたるふ真劍とゆ  
 研立らと身ふも数ヶ所の瘡と負ふのう持る  
 棒さ追くみ手元短く切り折らと今へ敵と  
 も叶ふ無念々々と言ひる短き棒と戦ひる

遂に命と殞せしへ又惜むべき壯士ありし其夜  
 少將の旅館にて愛妾の他下婢杯の傷を負ひ又  
 斫倒されて命と棄しをりつと言ふ又同所あり高島  
 中佐の旅館へも千場真鞆等が斫入りし須臾の  
 防げと終ふ及ぶ是れ敢なく命と殞され諸京街  
 柳川町あり聯隊長與倉中佐も憊る事と毫知  
 らず既小卧房に入りたる所へ突然として齋藤熊  
 四郎等甲乙の兇徒が襲ひ来りて矢庭小寝所へ

斫入りたる思ひ掛たる狼藉不脱と果べきやうも  
 糸と御預りの聯隊旗と賊手は渡まきふりしむと  
 數ヶ所の痍傷を負ふが又の下を潜り抜けて彼の  
 聯隊旗と搔抱き庭へむりしと飛下りて垣を破りし  
 隣家へ駈入り寐巻姿の事あるゆゑ此家も於て衣  
 服を改め聯隊旗と右手は持し領へ本營も趣  
 諸卒も指揮とさしたるも又一説あり此中佐が  
 途中まで駈出して見ると四方も猛火發りて炎焰

熾んは燃立たる不尚此所彼所小兇徒等が異形の躰りて屯集る官士と見れば理不尽の斫て蒐の形勢ある故中佐も空しく渠等が為小命を棄べき時よろむと途中より取て返り京町ある鱗開樓といふ割烹店へ這入り料理人の半纏を着て下賤の者の姿ふ打扮忍びて本堂へ行くとも何とふいさも大切なる御旗を守護して賊手小渡さば其職掌と耻しめざるに適といふ人と言ふべし

爰ふ又太田黒惟信と言へる元當國の豪農より凡郎の外廻り三里四方に威惟信の所有地といはば其家の富栄ゆる事是のよりいさも推て知る人殊更此人英智のりる文武両道に暗くは就中砲術に頗る熟練なせしをいへ舊態本の藩主渠を用ひて士族の列に加へて専ら兵制を一変し且銃砲を鑄造する事杯と司ごうしむるうち去る戊辰明治元年の事起り官軍関東小向ふ小及び乍ら参謀小撰を且て奥羽

あやとがら  
太田黒の  
従僕夜陰  
み兎徒の  
襲来せし  
を報せ



月名大正巴三編一



その他各所小至り屢戦功と露あつ夫それらら藩はんの  
權参事ごんざんじとあり廢藩はいはんある小至りて八代縣やちろんの参事ざんじ小  
拜命くわいめい一尋ひで大藏省おほくらうしやうの六等出仕ろくとうし小任にんぢぢと後のちも  
四等判事しとうはんじと命めいトららとて數年すねんの間官途あきと小安岡縣やすおかん一  
故ゆららと職あと辞やト先頃まへころ故郷こきやう小立歸たちかへり一安岡縣やすおかん  
令小選しやうせんままてて當時たうじ同縣民會どうけんめいかいの議長ぎちやうの職あ小付つて居ゐ  
たるたるる斯くの如ごとく小洋風やうふうと好あと開化かいけ小先立まへだちたる人ひとゆゆ  
神風連かみかぜの頑固黨がんことうハ忌憎いみやむ事こと甚ましく因よて縣令けんれい等らを

襲おふの序ついで小浦うら内田うちの高田たかたなど言いふ數名かずなの暴徒ぼうと走たせ  
向むひ一いが斯くる豪家ごうけの邸やしゆ名外なぐま構かまも嚴重げんじやうみ一いと輒さ  
く忍しのび入いり難がたうらん先門番まへもんばんと呼起よ起お一我輩われら至急しきゅうよ  
惟信殿ただのぶ小申入まうしれとた要用きやうようゆと疾とく面會めんかいと致いたさ  
とよと言いふ声こゑも最速さいそく一とれれば門守かどもりる下僕しもべハ訝あり  
恚いる深夜あや小何者なにものの且那ぜん小遇あんとい言いふああらんと格子こうし  
窓まどの透間すまより竊ひそ小門外かどがひとささ一覗のぞけけば甲冑かちゆう小身みと  
固かめ鎗あ薙あ刀あなど携たへへたる異形いぎやうの武夫ぶふ等らが突つッ立居たちゐ

月夜入立 巳三三三

たる小膽と潰して母屋小至り箇様々々と報知るあぞ  
 此時もでも惟信のまご寝もやうで燈火の下小獨書と  
 讀て居たり一が下僕が知らせ紙聞くよりも兼て不平  
 士族等が頻り小新令の出ると嫌ひつよく不平と鳴を  
 とやうん言ふ噂と聞つるが儲の暴挙小及べらう倘果  
 して介らんまの渠等と抗辨ま一たりともも劔撃をり  
 理不尽ある事と做らるべ防ぐ小術を一仍に只今む目  
 小掛まば姑く扣へらるやうみと返答小及び置汝等ひ

怪我せぬやうは何も小ありと身を潜めよと言付る  
 出遣り頓て十一歳と頭小三人の子供と小妻と俱小  
 裏口より忍びやう小落し遣り其身ハ當歳の稚兒  
 と懐小搔抱き窺よ庭小立出る茶園の中小引く  
 様子いふと窺ふ程小彼暴徒等ハ門外小ありさ  
 只今面會をて一と返答ハ聞つと更小門の扉と  
 開らぬ孫バ明らくと諸声小呼と叫べど寂莫と一と  
 ちや返答とまる者もあは小渠等の頻り小焦燥る



中ふ一個の喘雄あせうが門かどの柱はしらに攀登よぢり辛くるく内うちに乘のり超とへく乍まづち扉しらみと押開おひひらき一ひと人びと得えたりと躍あざり入い玄くろ関せきよりして會あひ釋やくもなく座敷ざしきの隈かたに索さがね廻まわれど  
 惟ただ信しんの言ことふも更さらあり家族かぞへ一個ひとも出會いであわぬ暴徒ぼうとら等らの  
 尚なほ焦燥しやうそうて庭にわふ立出たてで獵まれども更さらふ姿すがたの見えざるゆゑ諸もろの  
 惟ただ信しん其その機きと推おしし風かぜと喰くつと逃去にげりし此上このうへの意趣いそ  
 晴はるしふ家屋かやと焼やく腹はらと癒いんと奥表おくのうらの用捨もちなく焼やく  
 草くさと積た上げて一度ひとふらつと火ひと放はなせばさし豪家ごうかと聞きへ

たる大厦たうたくも忽たちまち地火焰ぢえんとありそ炎々えんえんとして燃上もえあり是こゝ  
 より先まづに惟ただ信しんを茶園ちやえんの裡うちに潜ひそみ居ゐけるが稍暴やがやう  
 徒等とらが庭先にわさきにも探索たんさくを志こころすの体ていある故爰ゆゑふらつんへ  
 尚危なほあやふしと築山つきやまに添そひ池いけと巡めぐりそ辛くるく渠等みづらが  
 又またと遁にせ終すに裏手うらでの潜ひそり門かどより忍しのびやうふ逃にげ出でて同どう  
 区内くわいに仕まむ所の馬淵うまぶち次郎じらう八はちの家いえに到いたりて後方あきを吃まり  
 度と顧くわんみて我家わがやの總すべて猛火まうかとありて最いとも熾さかんふ燃も立た  
 体ていゆゑ遠とほの惟ただ信しん切齒せつしと做なし我わが穩便うんべんに彼輩かのたひ派は立た



巨魁等  
自ら兵と  
率て鎮基  
本營を  
襲ふ

御神勅

月夜不夜巳下編



天照太神

神社

月夜不夜巳下編

去らせんと思ひ一故斯の如く計らひ一小家屋  
 を乱暴あまのまゝうけ恣に火を放ち家財を焦土と  
 せしむると思へい遺恨遣る方々一あまどひに逃竊れて  
 不覚の名を取らんよう取て返して彼者どもと有無の  
 勝負を決まご一小兒の姑く其許にお頼まうまると  
 懐ある稚兒を其所へさし置き駈出まごき形勢あり  
 一を主人の駭き縛り止め這る物おを一狂をせあふり  
 猛火の貴所の家のまゝうけ見らまよ所々火の手

の揚るの思ふ頑固の士族等が容易あうざる企を  
 癸したるふ紛まご一介まごは縣下一般の騷擾まご  
 物と惴りて事と過さんより我が茅屋まご姑く潜まご  
 篤と渠等が拳動を探り然して後右も左も計ら  
 るとも遅うとと辞を尽して諫へる惟信現もと  
 怒りを鎮めく須臾此家小潜居せ一故其恙るたど  
 得らまご一とぞ介まごは賊の巨魁上野加陽太田黒の三  
 名の既ふ兵士と分配しと諸手小進撃做さしめら

其身も腹巻はらまきも小具足こぐそく着きたる上うへも各直垂おのづかひさきと着きし或あるハ  
 烏帽子あがび或あるハある前立まえだて打うちつる兜かぶとなど思おもひくハ頭くわらも頂ひた  
 き見兵けんべい凡おほそつ餘名あまのなと左右さゆう前後ぜんごも率あつへつ天照太神御あまてらすかみ  
 神勅しんしやくもど種まねぐある文字もじと記しるせし大旗おほなほ小旗こなほと幾流いくあはう  
 夜嵐よあらしも吹ふまびりせ同時どうじも藤崎八幡ふじさきやまはちまんの社前やしろと進しん発はつも  
 及びおよび勇ゆうと進しんんで鎮臺ちんたいの本もと營えいもなん押寄おしよせたり  
 抑おさ此こ本もと營えいの舊城ふるじやうの二ふたの九ここのある櫻さくらの馬場うまばと言いふ所ところありて  
 西洋風せいやうふうも建築けんちくせし最も堅固かんとこの構かまへる事ことども暴徒ぼうと等ら更さらも

會釋かいしやくもまぐ門かどの邊へりも攻掛あせかつ乍まづち番兵ばんべいと斫き仆たし籠かご  
 入りまぐり營えい所ところもる玻璃はり宗むねと打毀うちこし豫よて用意よういを做なし  
 置おける加藤清正かとうけいせいの傳來でんらいと言いふ竹たけの筒つつも仕込しこみ火菜かさいも  
 火ひと移うつしと投入あづいる事ことも忽たちまち其竹そのたけ破裂はくさつして火氣かき八方はつぱうも  
 散乱さんらんるまより炎えん焰えん俄たちまち燃立もえたちたる煙けむりの中なかより兎うさぎ  
 徒等とらのいかにく得手えのひと振ありゆりゆり相手あいてと撰せんまが斫き  
 まるま不意ふいと打うちし營兵えいべい等らの上うへと下したへと混乱こんらんる事ことも  
 何等なんらの敵てきとも知しらざれば是これを防ふぐの術わざもくして瘡かさと負おふ者もの

の最<sup>いそ</sup>多<sup>た</sup>う時<sup>とき</sup>ふ此<sup>こ</sup>夜<sup>よ</sup>の宿<sup>しゆく</sup>直<sup>ちやく</sup>たる坂<sup>さか</sup>谷<sup>や</sup>少<sup>せう</sup>尉<sup>ゑい</sup>と喚<sup>よ</sup>るい世<sup>よ</sup>三<sup>さん</sup>  
歳<sup>さい</sup>の壮<sup>さう</sup>士<sup>し</sup>なるど勇<sup>ゆう</sup>気<sup>き</sup>勝<sup>か</sup>と一<sup>いつ</sup>者<sup>もの</sup>なるど此<sup>こ</sup>物<sup>もの</sup>音<sup>ね</sup>を聞<sup>き</sup>けり  
最<sup>さい</sup>初<sup>しゆ</sup>の失<sup>しつ</sup>火<sup>か</sup>せ一<sup>いつ</sup>あやと駭<sup>おど</sup>きあぐ立<sup>た</sup>出<sup>だ</sup>たるふ乍<sup>さ</sup>ち賊<sup>ぞく</sup>徒<sup>と</sup>が  
斫<sup>き</sup>て蒐<sup>さう</sup>むる思<sup>おも</sup>ひけりあはた太<sup>お</sup>刀<sup>たう</sup>先<sup>さき</sup>ふ身<sup>み</sup>をかをま間<sup>ま</sup>もあらずを  
こそ痍<sup>い</sup>傷<sup>きやう</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>ヶ所<sup>しよ</sup>負<sup>お</sup>ぐれば直<sup>ちやく</sup>ちふ病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>ふ駈<sup>か</sup>入<sup>い</sup>りて白<sup>しろ</sup>布<sup>ふ</sup>を  
ひて疵<sup>きず</sup>口<sup>くち</sup>とあざり再<sup>また</sup>び本<sup>ほん</sup>營<sup>えい</sup>ふ赴<sup>おもむ</sup>きけ慌<sup>あわ</sup>忙<sup>てい</sup>く兵<sup>へい</sup>卒<sup>そつ</sup>等<sup>らう</sup>を  
諫<sup>いさな</sup>め励<sup>あきら</sup>ま指<sup>さし</sup>揮<sup>き</sup>做<sup>しよ</sup>して群<sup>ぐん</sup>がる敵<sup>てき</sup>を防<sup>ぼ</sup>ぐまるふも玉<sup>たま</sup>込<sup>こ</sup>と  
まる虚<sup>い</sup>間<sup>ま</sup>わらず糸<sup>いと</sup>ば何<sup>なに</sup>と毛<sup>も</sup>小<sup>せう</sup>銃<sup>じゆう</sup>と打<sup>うち</sup>振<sup>び</sup>て當<sup>あ</sup>るふ任<sup>まか</sup>せ

難<sup>なん</sup>立<sup>た</sup>く須<sup>す</sup>臈<sup>らう</sup>の防<sup>ぼ</sup>禦<sup>ご</sup>も一<sup>いつ</sup>つと毛<sup>も</sup>不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>ふ出<sup>で</sup>る事<sup>こと</sup>なる  
進<sup>しん</sup>退<sup>たい</sup>駈<sup>か</sup>引<sup>ひ</sup>その図<sup>ず</sup>ふ至<sup>いた</sup>らぬ殊<sup>と</sup>も猛<sup>もう</sup>火<sup>か</sup>四<sup>し</sup>面<sup>めん</sup>ふ蔓<sup>まん</sup>焰<sup>えん</sup>炎<sup>えん</sup>  
焰<sup>えん</sup>のむせぶをりあは左右<sup>さう</sup>ふ従<sup>したが</sup>ふ兵<sup>へい</sup>卒<sup>そつ</sup>も枕<sup>まくら</sup>と並<sup>なら</sup>べ  
斃<sup>せ</sup>と一<sup>いつ</sup>く追<sup>お</sup>ぐふ猛<sup>もう</sup>き坂<sup>さか</sup>谷<sup>や</sup>もえや施<sup>せ</sup>をべき術<sup>じゆつ</sup>もま  
手<sup>て</sup>ふ携<sup>た</sup>りへ一<sup>いつ</sup>洋<sup>やう</sup>劍<sup>けん</sup>もさらふあは迄<sup>ま</sup>苦<sup>く</sup>戦<sup>せん</sup>せ一<sup>いつ</sup>ゆゑ  
身<sup>み</sup>も金<sup>きん</sup>鉄<sup>てつ</sup>ふけりざれば數<sup>かず</sup>ヶ所<sup>しよ</sup>の痍<sup>い</sup>傷<sup>きやう</sup>ふ弱<sup>じやく</sup>り果<sup>は</sup>終<sup>しゆう</sup>ふ  
火<sup>か</sup>中<sup>ちゆう</sup>ふ飛<sup>と</sup>入<sup>い</sup>りて煙<sup>えん</sup>りと俱<sup>とも</sup>ふ消<sup>しょう</sup>失<sup>しつ</sup>せ一<sup>いつ</sup>又<sup>また</sup>惜<sup>おし</sup>むる  
壯<sup>さう</sup>士<sup>し</sup>ありらる

此他本當の士官等が苦戦不及ぶ事より一と熊本の  
暴徒等が一段落終りて秋月款の拳動不及ぶ夫  
等の訳の第十四編より委しく説と見て知るべし

明治太平記十三編卷之二終

版權免許明治九年二月廿四日

版權  
免許

第六大區八小區  
本所外手町十八番地

著者 村井靜馬

第壹大區六小區  
日本橋通二丁目四番地

東京  
書肆 小林鉄次郎發兌

